

シー

どぶがれるC!

鏡川流域関係案内ブック



鏡川流域の
いろんな関わり方、
載ってます！



エ石山

鏡川流域マップ



鏡ダム



鏡川流域パートナーシップ
KAGAMIGAWA LOCAL AREA PARTNERSHIP



「どぶる」とは
土佐弁で
「飛び込む」こと。



index

- 03 「鏡川流域関係案内ブック どぶれるC!」とは
- 04 鏡川で「どぶる」とは?
- 06 水源で気づいた「当たり前」の日常の驚き
- 12 「土地の声」に触れるパートナーシップ
- 18 鏡川の放置竹林と「食べる楽しさ」
- 24 水が溢れる朝倉地域でつむがれてきた記憶
- 30 鏡川は高知市民のソウルリバー♪

- 36 パートナーシップを伝え続ける日々のこと
- 42 鏡川の札幌支部でどぶらさったトーク
- 50 宗安禅寺の住職が語る地域の絆と再生の物語
- 56 AIさんと玄ちゃんの役割が逆転すると感動が
- 64 ぼっちリユーザー大集合!
- 66 ぼっちリ体験で募集した!鏡川への思い

どぶれるC!

とは…

「鏡川流域関係案内ブック どぶれるC!」は
「鏡川流域パートナーシップ」のコミュニティブックです。

流域に関わる人たちの思いや活動を伝えることで
「なんかおもしろそう」
「自分もちょっとやってみようかな」
そんな小さな気持ちが
読んだ人のなかに芽生えるきっかけになれば
とつくりました。

鏡川の自然と人、人と人とのつながりづくりを
それぞれのフリースタイルで育てているのが
鏡川流域パートナーシップです。

鏡川をこれからも未来へ手渡していくために。

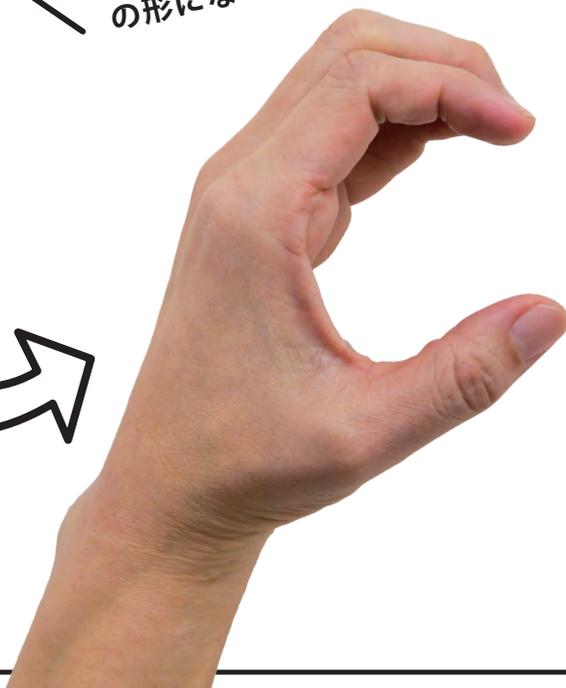
それぞれのやり方で動き始めている
パートナーシップの仲間たちを
この一冊で紹介できる限りにはなりますが
精一杯、伝えていきたいと思えます。

鏡川流域を
上から見ると…



鏡川流域マップ

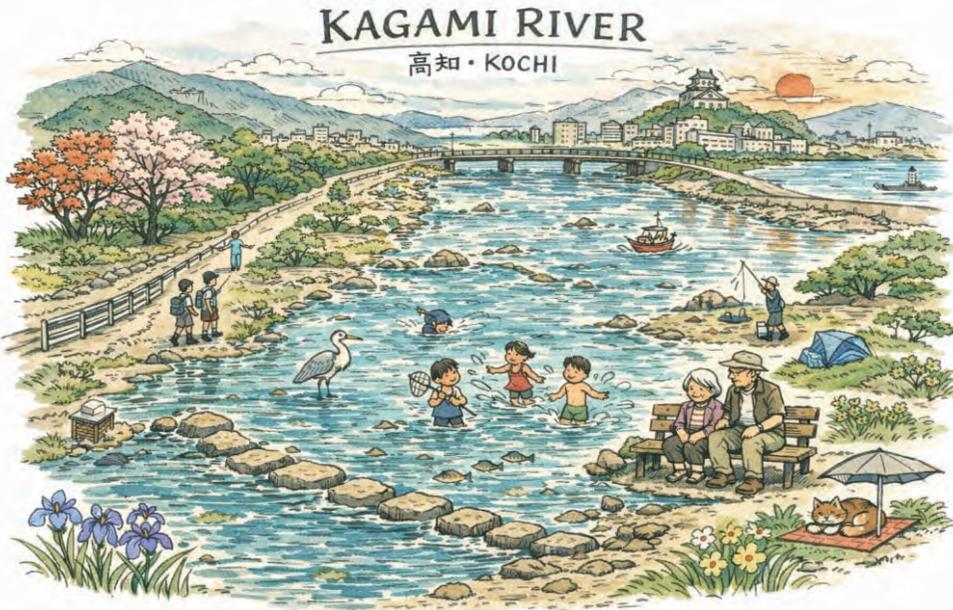
コミュニティ
「Community」の「C」
の形になっている!



鏡川流域パートナーシップを知れる
4つのキーワードをご紹介します

鏡川で「どぶる」とは？

文二関係案内ブック編集部



① 当たり前前の清流鏡川

高知市の土佐山地域を源流に、市街地をぬけて浦戸湾へと注ぎ込む「鏡川（かがみがわ）」。特別な観光地ではないけれど、「清潔なまちのシンボル」とも称され、日々の暮らしの風景として親しまれています。

同じく高知県を流れる四万十川が「最後の清流」、仁淀川が「奇跡の清流」と称され、全国的な知名度を誇るのに対して、鏡川はあまりにも日常の風景。だからこそ、愛着と誇りを込めて、「当たり前前の清流」なんて呼んでいる人もいます。

② 鏡川流域パートナーシップ

2021年に始まった高知市の「鏡川流域関係人口創出事業」、通称「鏡川流域パートナーシップ」。事業のなかで開講された「鏡川流域関係人口講座」の受講生をはじめ、年齢や立場、職業、さらには活動するジャンルの垣根を超えて、それぞれがフリースタイルな発想で、鏡川流域の自然と人、人と人のつながりづくりに取り組んでいます。



③ まちのコイン「ぼっちり」

関係人口創出事業で同じく運用されている「まちのコインぼっちり」は、流域内はもちろん、全国にユーザーさんがいるコミュニケーションツール。流域のいろんなところに、ぼっちりのスポットやコインが置かれています。

ちなみに「ぼっちり」とは、土佐弁で「ちょうど良い」という意味なんですよ。

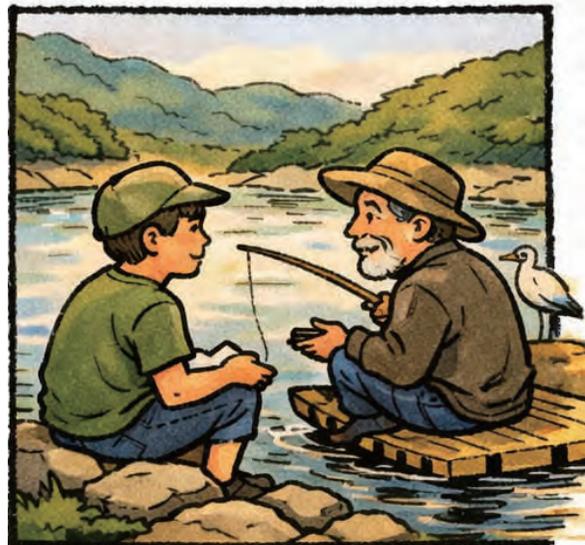


④ どぶる

「どぶる」とは、土佐弁で、川などに「飛び込む」という意味。水辺で遊んでいると、「えいねえ、どぶっちゅうやか〜」なんて声が、どこからともなく飛んできました。

さらに鏡川流域パートナーシップのコミュニケーションでは、「どぶる」は、よく多用されている合言葉のようなもの。

「非日常に飛び込んでみる」とか、「気がついたら夢中になっていた」とか、「物事や考え方の深いところにもぐってみる」、「自分のりのやり方で挑戦してみる」といった活動に、「すごい！ようそこまでどぶりましたね〜」と、拍手喝采が湧き起こっています。そう考えると、鏡川でどぶることができるとは、川だけじゃなく



て、流域にあるいろいろな自然だったり、歴史だったり、コミュニケーションだったりのかもしれない。

なにせよ、鏡川らしい「どぶり（どぶること）」とは、自分が楽しめる、自分らしいやり方、それぞれのフリースタイルでOK。

あなたが、「どぶれる（どぶることが出来る）」、鏡川流域との関わり方が見つかったら、どんどんどぶってみてください！

日常のなかの非日常に、どぶる

水源で気づいた 「当たり前」の日常」の驚き

「鏡川流域関係案内人」として
さまざまな関わりづくりを行っている

土佐山地域の山中晶一さん。

平石地区の水源を訪ねながら
パートナーシップについて教えてもらった。

文=今橋大輝



かつて土佐山の人びとが頼りにした水源。いまも水が流れ続ける谷の、そのさらに上流へと目を向ける。

鏡川流域の「スイミー」

山中晶一さんは、鏡川の「釣り名人」で、ときどき古畑任三郎のモノマネをしてはみんなを笑わせてくれる、とつても気さくなナイスマドル。市役所の職員、土佐山は平石地区の区長、森林インストラクター、はたまた、全国に千人を超えるメンバーがいるオンライン会議「全国防災関係人口ミートアップ」の主催者、というより「ジェネレーター（「問い」や「気づき」を生み出す仕掛け人のような存在?）」でもあるという。誰もがいろいろな顔を持っていて、どれが「そのひと本人」ということもないけれど、鏡川流域パートナーシップの山中さんについて言えば、彼は「鏡川流域関係案内人」で、みんなから「スイミー」と呼ばれている。

毎週木曜日にオンラインで開催されている「鏡川流域関係人口交流会」。4年間で開催された回数は100回を超える。



絵本の「スイミー」のように、鏡川流域パートナーシップをけん引しながら、つねに現場に身を置いている山中さん。



土佐山生まれで、子どもの頃から鏡川上流域での魚釣りに親しんできたという。いつでも釣竿を持ち出せるようにしている。

2021年に鏡川流域パートナーシップが始まったとき、それを市役所のなかで先導していた人物こそ、山中さん。「パートナーシップができた理由を知るなら、まず山中さんを訪ねねば!」と取材を打診すると、「それなら、うちの平石地区の水源を案内しましょうか」とのお返事。そこは、鏡川の上流域。文字通り、始まりを訪ねるような感覚があった。

「枯れた水源」を訪ねる

高知市の土佐山地域には現在800人ほどが暮らしていて、生活に使っている水は集落から離れた場所から山水を引いているという。山中さんが案内してくれたのは、30年ほど前まで使われていたという、古い水源。その道すがら、山中さんは「里が山に戻って

いるんで、気をつけていきましよう」とひと言。市街地で暮らしていても、山を遠くに見ることはできるけれど、実際に山に入ることなんて、めったにない。だから、遠くに見えている山の中がどんな状況になってるかなんて、当然ながらわからない。それが取材では、まさに目の前に現れてきた。

整備された山道はいつの間にか途切れ、落ちていた枝でも杖にして握ってないと、足元がおぼつかない。見上げれば、山中さんが「手のつけようがないね」という放棄された竹林が広がっていて、植林されたスギも伐採されないので、森のなかは、ちよつと薄暗い。60年ほど前は2000人を超える住民がいたけれど、それも減少の一途をたどり、高齢化も進んでいて、もう、山に人の手が入らなくなっている。

鏡川上流域にある土佐山地域の平石地区。



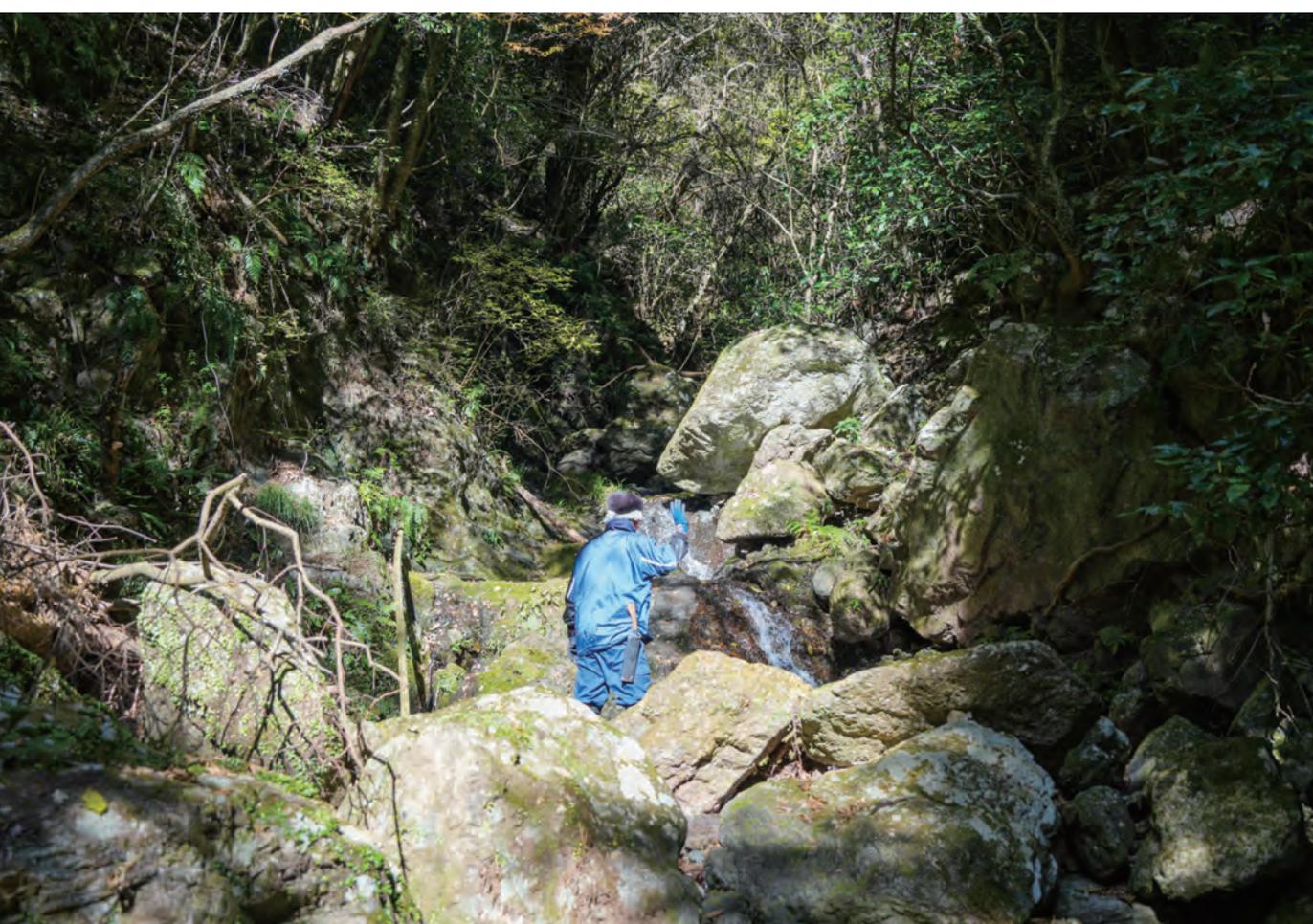
2025年12月に実施した取材イベント「土佐山に行って、みんなの山中さんに取材させてもらおう」。下流域の住民はもちろん、東京からも参加者が集まった。



- ① 森林や山道の行く手をはばむ、「放棄竹林」という課題。土地の所有者すらわからない場所もあるという。
- ② 参加者がロープに掴まって進む道なき道は、かつては小学生が毎日使う通学路だったという。「がれ場」のように、足を滑らせると急斜面に落ち込んでしまいそうになる。ここはやむなく引き返す参加者も。
- ③ 水源に向かう途中、水が流れる管の状態を確認する山中さん。

「市街地だったら、水道は市役所が管理してまずけど、土佐山の集落では、水源の管理は住民が行わなければならなくて。それだって、どんどん難しくなってきたって、いまま山に戻りかけている山道だって、人が10回通るだけでも、道がついて歩きやすくなるんです。たとえば、水源でコーヒーを沸かして飲むとか、どんなかたちでも、人と水源との関わりができれば。」

鏡川流域パートナーシップができたのは、まずはそんな「関わりづくり」のため。いわゆる「環境保全の活動」だけじゃなくて、参加した人が楽しめる多様な関わり方を流域のいろんな場所に生み出すことができれば、同時に流域をめぐる課題も知られて、「なにかできないか」と思う人だって、きっと増えていくだろう。





古い水源で流れていた山水。筆者には、とても美しく感じられた。

当たり前前の日常は 愛おしすぎる非日常の連続

そんなふうには、地域課題の解決をライフワークにしている山中さんだが、その一方で、山に戻って、里山や廃れていく水源に対して、ただ否定的な目だけを向けているわけではない、という。

「古い水源の険しい沢をたどっていると、昔の炭焼き場を見つければ、

こともあって、「こんなところも、先人にとっては暮らしの一部だったのか!」と驚きます。放棄されている竹林も、もともとは暮らしに役立てるために、先人が山に植えたもの。スギやヒノキも同じですよね。里が山に戻っていくこの光景も、自然のなかで暮らししてきたひとの営みの結果。そう思うと、言いようのない、愛おしさみたいなものも感じる。」

千年も経てば、自然は本来の姿に戻っていくだろう。そこには、もとの山、高知の気候風土なら、シイ・カシ類の照葉樹林が広がっていて、ひとが植えた竹林も、スギも、ヒノキも、なくなっている。「それでいい」と言う人もいるかもしれない。でも、「なんか寂しい」と思うのも、やっぱり人間だ。

「街に暮らしていたら非日常ではないこの場所も、ほんの30年

くらい前までは、ひとびとの日常の現場だったんです。先人たちの日常の跡を見つけて私が驚いたように、いまの自分たちの日常も、後の人から見たら驚くべきものかもしれない」と山中さん。そう思うと「非日常」とは、都会のテーマパークとか海外の絶景だけじゃなくて、自分たちの生活そのものも、そうかもしれない。

「当たり前前の日常が実は当たり前じゃないことに気づいたら、きっと、自分が暮らす地域に愛おしさを感じられるはず。そこで何かを感じて、もちろんそれだけでも十分だし、それからもし、自分なりに「これをしてみよう!」と思つて、何かの一步を踏み出してくれたら、その一步は、まったく感動でしかない。鏡川流域は、そんなパートナーシップでありたいですね」と話してくれた。

コミュニティのつながりに、どぶる

「土地の声」に触れる パートナーシップ

「鏡川流域関係人口創出講座」の受講をきっかけに
藤澤佑介さんがはじめたのは
流域を舞台にした、感性がひらかれる場づくり。
コミュニティとつながることで気づきはじめた
人と自然のあいだで交わされてきた「土地の声」に
耳を澄ませてみることについて。

文＝藤澤佑介

雪がちらついた「水源クエストハイキング」を開催中の藤澤さん（2025年2月）。



「役に立たない塾」が開催する「Feel度 Walk」のイベント。日曜市や鏡川上流域の各地を歩きながら見つけた「なんとなく気になるもの」をイラストにしてみることで、感性をひらいてきた。



パートナーシップとつながって

「最初はいつだっけ？」とアイフォンのメモを探ると、2023年9月1日だった。「鏡川で遊びのデザイン力を育もう」という、遊びの体験プログラムを考えるイベントに参加したのだ。

これが私が鏡川流域パートナーシップのコミュニティにとぶつた入口。あれから2年。気が付いたら、「役に立たない塾」という私塾を立ち上げ、鏡川流域を舞台に、子どもも大人も一緒に遊び・学ぶイベントをいくつも企画・運営していた。それぞれのイベントの意図や感想などは、note「ふじぼん..役に立たない塾主宰」で詳しく書いていたので、ここでは、この2年、自分の意識がこのコミュニティに支えられてどのように変化してきたのかについて書いてみたい。



2024年11月に開催された「朝倉城跡 歴史探検ハイキング」。城郭好きの参加者はもちろん、郷土史に詳しくなくても、地形に残された城の「守り」や「攻め方」を想像して楽しむことができました。

鏡川で見つけた
なんとなく気になるものたちが
問いかけてくること。



雪の水源で味わったコーヒー。いろいろな感覚を通じて、いつもと違うワクワクを感じた。



朝倉城址で目にした、城の防衛のために築かれたと思しき、巨大な溝。古地図を片手に歩いた。



小雨が降る鏡川上流域の「鏡吉原ふれあいの里」では、いつもより多くのサワガニが姿を現していた。

なんとなく気になるもの

どのイベントでも私の中心にあつたもの、それは、鏡川流域を歩きまわり、そこで目にした「なんとなく気になるもの」を集めることだった。

それは、川べりでちょっと面白い形に見える草木や石ころの配列だったり、日曜市を彩るおいしそうな野菜だったり、雨のなかちよろちよると走り回るサワガニだったり、中世の先人が城の防衛のために掘った巨大な溝だったり、なぜだかまるやかに感じた水源の水で淹れたコーヒーの味だったり。

時にはそれをスケッチしたり、時には参加者と対話しながら、こうした「なんとなく気になるもの」を追いかけているうちに、「目の前にあるこの風景のなかで起きていることが、一体なぜそのような

成り立っているのか」が気になりはじめた。

なぜ冬になるとこの赤色の実が目立つのか？ 目の前の鏡川を流れる水はどこから来てどこに行くのか？ ここにある石碑は誰がいつ何の目的で置いたのか？ この山は荒れているのか？ 大昔この土地で人々はどんな生活をしていったのか？

このコミュニティで自然と人と遊びつつ、こうしたこの土地の自然の理や人の営みに関する問いがじんわりと自分のなかで溜まり、熟成・発酵されていった感覚。

「土地の声」を聴きながら

毎週のオンライン交流会は、そんな熟成・発酵を支えた「ぬか床」のような存在だ。そこにたまたま集まってしまった人の興味に寄り



「水源クエストハイキング」では、寒空の下でも、自然に刺激されて走り回る子どもたちの姿があった。



かがみがわ大交流会（2025年2月）で、ファシリテーターを務める藤澤さん。

コミュニティがさらなるつながりを生んでいく。

添って、鋭くもとりとめもなく展開されていく話。中山間地域のモビリティ問題を熱く議論したり、イベントの企画をしたり。ときにはラジオを聴くように参加しながら、流域地図をひたすら眺めていたこともあったつけ。

そんななかで、それまで集めていた「なんとなく気になるものは、いい感じに私の頭のなかがかき混ぜられて、熟成・発酵がじんわりと進むのだ。次の興味が自然に湧いてきたり、新しい疑問が芽生えたりする。交流会のなかで浮かんできたキーワードをもとに、自分で本を読み、一人で歩き回り、新たな人と出会い、対話し、一緒に遊び、さらにイベントを思いついたり。そうして気が付いたら、この「土地の声」みたいなものが少しずつ聞こえるようになってきた。そう、土地の声が聞こえ始め



朝倉城跡で、戦国時代の暮らしの営みを想像しながら。

たのだ。非常に感覚的だが、無理やり言葉にするとすれば、それはこの土地のエコシステム、生命の理とつながり、人と大地の歴史と生活の営みに目が開かれ始めた、ということなのかもしれない。

いま、この土地の声が少しずつ大きく聞こえるようになる感じが、とにかくたまらなく楽しい。そこには、土地の声を受け止めて、自分もそこに生かされているひとつのいのちとして、より豊かに生きられるようになる感覚がある。

そう思うと、この2年で起きた意識の変化って、コミュニティの捉え方なのかもしれない。当初は、「一緒に面白いことをやる人の集まり」をコミュニティだと思っていた。でも鏡川の流れに身を任せて2年、もっと大きな生命のつながりとして鏡川流域のコミュニティを楽しんでいる自分がある。

自分ができる関わり方に、どぶる

鏡川の放置竹林と

「食べる楽しさ」

「タケノコ食べて放置竹林解決プロジェクト」を立ち上げ、自分ができるアクションを続けている大久保さん。そのチャレンジを振り返った。

文〓大久保真希



プロジェクトの取り組みで、タケノコの料理を持ち寄る。美味しい課題解決！

食べることなら私にもできる

「食べることなら私にもできる。」
そう思えたことが、竹林との関わりのはじまりでした。

鏡川流域には、手入れが行き届かなくなった「放置竹林（放棄竹林）」が広がっています。「竹は成長が早く、放置されると周囲の木々を圧迫し、景観や生態系に影響を与える存在になる」と、鏡川流域関係人口創出講座で初めて知りま



大久保さんが訪れた、土佐山地域の放棄竹林の様子。

した。

土砂災害の遠因になるとも聞き、身近な川の風景の裏にそんな課題が潜んでいることに驚いたことを覚えていきます。

川の勉強に来たはずなのに「山？」って思ったのも、このとき。「実は川と山って、こんなに密接に関わっていたんだなあ」と、そのとき初めて実感しました。

とはいえ、「竹林整備をしよう」と強い使命感で動き出したわけで



山中晶一さんも関わり、放棄竹林の課題解決に向けて活動をスタート。

はありません。

きっかけはもつと個人的で、「食べることなら誰でも関われるのでは？」という素朴な発想でした。

産直市を巡り、旬の食材を探す時間が好きでした。食べることも好き。その一方で、正直に言うと、タケノコは少し苦手な食材でした。春の風物詩ではあるのですが、産直市に並んでいても、どこか他人事のように通り過ぎていたのです。



たぶん一生で一番 タケノコを食べた時期

そんなとき、この講座のなかで、ふと小学生の頃の記憶がよみがえりました。私がつっていた小学校の近くに、タケノコの缶詰め工場があつたのです。

私は南国市の国分川流域で育ち、子どもの頃はよく川で遊んでいました。川つながりの風景が、鏡川の話と重なり、急に遠い問題ではなくなつたのです。

講座で教わつた「長続きのコツは、好きなことと結びつけること」という言葉も背中を押しました。私にできて、続けられそうなこと。それは「タケノコを食べること」でした。

若竹を掘ることは竹林整備にもつながりますが、春のタケノコ掘りは、すでに多くの人に関わつて

います。ならば私は、別の切り口で関われないか、と考えました。思い出したのは、収穫されたタケノコが地域の加工場でゆでられ、缶詰めにされる光景です。

いまは冷凍や瓶詰めなどの加工もあり、タケノコは春だけの味覚ではなく、一年中食べられる食材です。食べることは単なる消費ではなく、地域の手仕事を支えることでもあると気づきました。

タケノコは煮物や炊き込みご飯だけでなく、洋風料理にしてもおいしい。「どうすればもつとおしく食べられるだろう」と考える時間が、竹林との小さな接点になっていきました。

たぶん一生で一番、タケノコを食べた時期だと思います。

タケノコアヒージョは プロジェクトの名物に。



大久保さんの「タケノコアヒージョ」は、プロジェクトの名物に。自分の好きなことや、できることを課題と結びつけ、動き続けると、新たな気づきや仲間を得ることもできる。



まちのコイン「ぼっちり」のスポット「タケノコ食べて放置竹林解決プロジェクト」を立ち上げて活動している大久保さん。「美味しく・楽しく」タケノコを活用する方法で取り組む。

人は生きている限り食べる

小さな食のイベントも自分で企画して、「これから」というときに、私は倒れました。2024年4月、右小脳出血。生死をさまよい、リハビリに向き合う日々のなかで、「もとの自分」に戻ることばかり考えていました。けれど一年半ほど経った頃、「新しい自分でできることを探そう」と思えるようになりました。

そこであらためて、「食」と向きあいました。人は生きている限り、食べるのです。かたちは変わっても、続けられる関わり方がある。

そう気づいたとき、「タケノコを食べるプロジェクト」は私にとって無理のない関わり方だと確信しました。

山に入って竹を伐る人、加工し届ける人たちがいるから、私たち



2025年11月に開催された「タケノコを食べる放置竹林解決プロジェクト」のランチ会。大久保さんに会うために、パートナーシップの仲間たちが集った。

はタケノコを味わえます。

だから私は、食べ続けることで関わっていききたい。

豊かな時代だからこそ、何を選ぶかに小さな理由を持ちたいと思うようになりました。

まずは一品持ち寄って「おいしいね」と笑い合うところから。

食卓の一皿が、山や地域の営みにつながっている。その循環に、楽しみながら参加する。それが、私なりの竹林との関わり方です。

よければあなたも一緒に、鏡川を望みながら、タケノコ料理を囲むランチ会から、ゆるやかにはじめてみませんか。



「はじめまして」の参加者も、大久保さんの話を聞きながら、自然と会話したり、笑い合ったり。鏡川の開放的な空間が、人と人の心の距離を近づけてくれた。

水が運んできた暮らしに、どぶる

水が溢れる朝倉地域で

つむがれてきた記憶

高知市の朝倉を歩いていると
水の気配がいつも足元にある。
用水路や地下水が毛細血管のように
張り巡らされていて
暮らしに届けられている。

取材 福井美和 文 今橋大輝





福井さんが企画してくれた取材イベント「朝倉の技と知恵にふれる一日」(2025年10月)の参加者。写真の左端が福井さん、中央右が鎌倉さん。

水が豊富な朝倉地域。



鏡川の水と土が運ばれて

高知市の朝倉(あさくら)と聞くと、「高知大学がある場所」と連想される方も多いかもしれない。中心部から路面電車に乗ったら、電車が鏡川を渡る「鏡川橋」あたりから、なんとなくこの地域に入っている感じがする。反対に、上流から鏡川の流れに乗って行くなら、朝倉は、ちょうど中流から下流へと移り変わるあたり。「宗安禅寺付近で、はじめて川の兩岸が大きく開けて、そこを三角洲の起点にするように、山間部から運ばれてきた土や石が堆積することで、高知市の平野部が形成された」なんて聞いたことがあるけれど、朝倉は、そんな流域の右岸に当たる場所。上流から流れてきた川の勢いをまともに受けるぶん、水も堆積物も豊富に供給されてきたことだろう。

このコーナーの取材を企画してくれた福井美和さんは、生まれも育ちも朝倉。高知大学を卒業して、いまもこの地域で暮らしながら、働いているそう。「ホントにずっと住んでますけど、ご近所の方に地元のはなしをちゃんと聞いたことは、あんまりなくて」と、地域の世話人や農家さんにお話を聞く機会をつくってくれた。

最初に訪問したのは、鎌倉俊司さんのご自宅。まず目に入ってきたのは、たつぶりの水をたたえた金魚鉢が、お庭にとろせましと並んでいる光景。鎌倉さんは「高校生の頃から土佐金を育てよって。金魚の水は地下水を汲み上げてます」と言う。「まだ冬はいいけど、夏は水温が低くて、だいたい13℃くらい。そのままやったら、金魚を泳がせれんくらい。」この豊富な地下水は、鏡川水系のものらしい。



暮らしのなかを川が流れる。
地域に思い出を運んでくる。



絵金の襖絵も展示される「朝倉神社」の夏祭りなど、地域の世話人役を務める鎌倉さん。

暮らしに、記憶に、溢れる水

朝倉地域には、そこかしこに水路が流れている。主に「朝倉堰」から取水された鏡川の水が、地域の隅々にまで行き渡っているのだそう。「僕がまだ小学生やった70年くらい前は、畑や田んぼだけじゃなくて、家の敷地内まで用水を引いて、お皿を洗ったり、池をつくったりしよった」と鎌倉さん。夏休み、夕方になると用水路に、竹ひこを編んだ捕獲かごを、入り口は必ず川下に向けて仕掛けた。翌朝それを引き上げると、ウナギやツガニ（モクスガニ）が入っていたという。水路の縁の草木には、ホタルが飛び出して来る。それを竹ぼうきの枝に留まらせて集めて、旧国鉄時代の朝倉駅の駅員さんに持って行くと、1匹1円で買い取ってくれた、なんて思い出もあるそうだ。



もちろん、恵まれた水量が運んでくるのは、快適な思い出だけではない。「昭和50年頃に、すごい大雨があつて。鏡川が氾濫して、朝倉も浸かったことがある。どこかの家の池から流れてきたのか、美しいコイが道路を泳ぎよつて、それを手で捕まえたことを覚えてちゆう。あのときは、僕の仕事の道具も、クルマも、当時はぜんぶ流されたねえ。」それでも鎌倉さんは、水を

うらんでいるようには、とても見えない。「朝倉の地下水は、ほんとうに美味しい。鏡川水系の水は、水の質も量もまるで違う。」

ご自宅での取材を終えると、みんな一緒に朝倉を歩いてみた。福井さんにとっては歩き慣れた近所でも、鎌倉さんがいるからか、いつもより水路に目が向かう。やがてやってきたのは、住宅街を流れる「前田川」。ちなみに朝倉堰か

ら取水された用水は、最初は「朝倉川」と呼ばれていて、地域を下つて前田町にさしかかると、今度は前田川と呼ばれるようになるのだそう。福井さんは、この前田川をひと月ほど前に散歩していたとき、水面をヒューツと飛んでいくカワセミを見かけたのだという。暮らしのなかを流れる川は、いつの時代でも、どこか美しい思い出を運んでくれるのかもしれない。

水があったち、しゃあない

続いて訪れたのは、60年近く朝倉で農業に従事しているという宮崎久司さんの畑。まずは住宅地に囲まれた畑を見せていただいた。

宮崎さんのところでも、用水路から取り入れたり、地下から汲み上げた水を使っていて、お米やナス、ニンジン、タマネギ、ニラ、ハブ茶、さらにハウスには、コマツナの日除も兼ねたブドウの木もあつたりと、いろんな農作物を育てている。JAのほかにも、朝倉生産者直売所「あかいし」に毎朝出荷しているという。その一方で、「まあ、水に困ることはないけれど、後継者が減りゆうき、いかんねえ。」高齢化はもちろん、ここ数年でさまざまなものの価格が上がったことから、稲作農家が急激に減ってしまったそう。

**水は流れ続けても、
景色は時代とともに移り変わる。**



宮崎さん（下写真の中央）は、新しい品種や栽培方法を学ぶために、地域の研修に行くこともあるという。左写真は、宮崎さんが「あかいし」に出荷したお野菜。





家庭菜園に設置された手押しポンプで地下水を汲み上げる。
いつまでも水が溢れてくることに、頼もしさを感じた。

そのせいか、地方都市の郊外でよく見られるように、朝倉でも畑地は減少し、その代わりに増えているのは住宅地。「水があつたち、しゃあないで」と宮崎さん。福井さんも、「なにか関わりしろができんろうか」と、目の前に広がる、朝倉のいまの景色を見ていた。

農家さんの広い田畑と、それを取り囲む、さらに広い住宅地。そのあいだにちらほら見かけられるのは、小さな家庭菜園の畑たちだ。そのなかには、福井さんが育てている場所もあるという。「どんなことができるか、いまはわからんけど、鎌倉さんにいろいろ聞けておもしろかったし、宮崎さんにも、今度、野菜の育て方を教えてもらわんと。」そんな地域のなかでのつながりが、なにかを生み出していくのかもしれない。

人新世を生きる川に、どぶる

鏡川は高知市民のソウルリバー♪

『川から始める地方再生』の著者・水谷要さん。

鏡川流域の関係人口として、「水の循環に参画すること」を語る。

文〓水谷要



未来の鏡川へのメッセージ

ここ最近、自然とか環境のニュースで耳障りの良いハナシはあまり聴こえてきませんよね。

やっと黒潮の大蛇行が終息したのに、海水の温度は高温が続いていて、「牡蠣や法螺（ホヤ）が壊滅的な打撃！」とか、「サケが戻ってこない！」とか、「なんちゃらー！」とか。いままでの当たり前の日本の四季がなくなり、すべてが過去のことになってしまいそうな、そんなイヤなニュースばかりが目につきますよね。

日本の海や川はどうなっちゃったのでしょうか。全国には何万本もの川があつて、海に注ぐ河口ベースでは、5千本以上の川が陸から海に注いでいます。そんな森・川・里・海の関係性が、いま揺らいでいるように感じます。



2025年7月に開催された「第3回川から始める地方再生サミット」では、鏡川上流域を巡りながら、鏡ダムでの生き物観察も行った。

ところでいきなりですが、海の生きものたちは、どうやって「水を飲む（摂取する）」のでしょうか？すべての生物が通常の生命活動を行うには、「水分」と「ミネラル分」が必要不可欠ですが、よくわからないですよ。

多くの海水魚たちは積極的に海水を飲むのですが、余分な塩分をエラや腎臓から排出することができるので、塩分濃度を調整しながら水分補給しているようです。

一方、海洋哺乳類（クジラ、イルカ、アザラシ、アシカなど）やペンギンなどは、海水は飲まず、捕食する餌から水分を摂取しているそう。

それでは、川に住む淡水魚たちはどうでしょう。淡水魚は、水を飲むと体内の塩分が薄まってしまいうため、ほとんど水を飲みません。それでも、かれらにとって塩分（正

確には、塩分に含まれるミネラル）は欠かせないもの。必要なのは、海水のような高濃度の塩分ではなく、生命活動を支えるための、ごく微量のミネラル。だからこそ、淡水魚が暮らす川が、源流から海まで、ミネラルを含んだ良質な水を流し続けることは、流域に生きるすべての生きものにとって、とても大切なことなのです。

地域を流れる川を大切にすることは、我々にとっても最も重要な「命の源」と言えます。

だからこそいま、川の大切さを見直す活動が全国でも注目されているようです。



どこにもある清流、鏡川

それでは鏡川の「命の源」はなんでしようか？ それは市域内、旧土佐山村・鏡村などの上流部から河口部までの繁栄を支えてきた、文化・歴史・技術などの生業と、それを支えてきた先人たちの気骨、そして、水辺林をはじめとする豊かな流域の自然資源ではないでしょうか。

鏡川は「人新世（じんしんせい）」の時代をたくましく生き抜いている川だと思っています。人新世とは、地質学の言葉で、人類の活動が地球の地質や生態系に影響を与えた、現代を含む時代区分を指します。その特徴は、人類の活動によって生じた地球温暖化などの気候変動、大量絶滅による生物多様性の喪失、人工物質の増大、化石燃料の燃焼や核実験による堆積物の変

化などとされています。このように、人類が地球の地質や生態系に与えた負の影響は計り知れませんが、そんな現実のなかで地球環境に向き合わなければなりません。

全国的にも珍しい 陸封アユが生きる上流域

そんななかで鏡川ダムの上流域には、陸封されているのにアユの生態系ができています。しかも漁業資源としても期待できるほど安定しています。本来、アユは海と川を行き来する魚類ですが、鏡川上流では降海することなく、その閉鎖区域で一生を終え、次世代にその子孫を継承しています。そしてダムの下流域では、今年もたくさんのアユたちが産卵して子孫を継承しています。分断されていても、たくましく進化してい



「鏡ダム湖とその上流にアユの生活史が形成されているのは不思議」と水谷さんは考えている。



「土佐鏡湖」の名で親しまれる鏡ダムは、1966年に完成。以来およそ60年にわたり、流域の治水と利水を支えてきた（上写真）。さらに上流の「桑尾橋」では、多くの淡水魚の姿を観察することができた（下写真）。

るアユのことを思うと、「人間も自然の一部」と考えて、独善的なふるまいを慎むことを同時に肝に銘じなければ、と思います。

そんななかでふと気づいたのは、「伝統を守ることは進化である」ということです。

ご当地に太古の昔から連続と続く伝統産業や文化には、きわめて卓越したノウハウがあります。言い換えると、自然生態系を地域資源として利用するには、その維持回復のための地域プログラムによる循環型のシステムを構築すること、それに、新しい産業技術と情報発信の基盤を持ち外部との交流を実現すること、また、六次産業化の発想が大切である、ということです。

2025年、毎月のように開催されてきた「川セミ」。



- ① 2025年4月、高知・鏡川で初めて開催された「川から始める地方再生サミット」、通称「川セミ」。鏡川との関わり方を考える作戦会議が、ほぼ毎月のように開かれている。
- ② 「川セミ」で、さまざまな取り組みのアイデアを提案する水谷さん。
- ③ 水谷さんのつながりをきっかけに、2025年9月にはプロの調香師・桑山佳織さんが東京から来訪。流域の魅力を香りで味わう「アロマミスト作りワークショップ」を開催してくれた。

水の循環に参画することが 地域を魅力的にする

人間は生まれながらに「水の循環」に参加しています。その連鎖は、人間の住地域から河川流域へ、そして川から海へ、やがては地球全体へと影響を及ぼしています。

いま世界中で、いろいろな環境破壊が問題になっていきます。たとえば、ハワイ諸島のアホウドリは、人間による乱獲をはじめ、気候変動や流出した漁具が絡まってしまふこと、さらにはプラスチック汚染など、複数の要因による被害を受けています。特に、プラスチックごみを餌と間違えて誤食することとは、深刻な被害をもたらしています。

マイクロプラスチックは、生物が餌と間違えて摂取することで、内臓を傷つけたり、消化不良を起

こしたりします。また食物連鎖を通じて生物に蓄積され、生態系全体を汚染します。プランクトンなどの微生物がマイクロプラスチックを摂取し、それを小魚が食べ、さらに大型の魚が小魚を食べる、という連鎖のなかで、有害物質は徐々に濃縮され、やがては巡り巡って、人間にかえってくるのです。

左の写真は、「ユキモチソウ」という「絶滅危惧種II類」に指定されている希少な植物です。昆虫を誘惑して(？)、受粉を助けてもらっているようですが、食虫植



物ではありません(ビミョーなタンスが素敵です)。

世界の農作物は大多数が昆虫に依存しており、私たちが日常的に食べている多くの野菜や果物を生産するには、昆虫による花粉の媒介が不可欠です。

現在使用されている医薬品全体の約半数は、天然物そのものか、天然物を参考に化学合成されたものであるといわれています。

人類の健康を守るためには、地球の健康を維持するための良質の水が必要です。

地域コミュニティが魅力的であること、そのカギは「水の循環」への参画ではないでしょうか。

夢中になれる自分らしさに、どぶる

パートナーシップを

伝え続ける日々のこと

まちのコイン「ぼっちり」の運営をはじめ、

「鏡川流域パートナーシップだより」を作り続けてきた綿谷さん。この5年間で振り返りながら、感謝と挑戦を伝える。

文〓綿谷有紗



まちのコインで楽しむことができる「まちのクイズ」も、綿谷さんが作成している。

鏡川流域パートナーシップと ぼっちりにどぶる日々

「鏡川流域関係人口創出事業」がスタートしてから、私の日常は激変しました。ただし、周りの環境は何も変わっていません。私の視点や姿勢が変わったのだと思います。

この事業を通じて、素敵な人にとくさん出会いました。自然と人のせめぎ合いの尊さを熱く語り、それを守り伝えようとする土佐山の釣り名人や、自然のなかでの学びや遊びを探索する英語の先生など…。自然に対して敬意を払い

つ、自分にできることを常に模索し、生き生きと活動し続ける皆さんの姿はとてもかっこいい！そんな姿を見て、「私も何かやってみたい」と思うようになり、鏡川の風景を紹介するインスタグラムをはじめたり、「ぼっちり」の運営団体という立場をフル活用して、オリジナルの「ぼっちり」コンテンツを作ったりと、日々、鏡川流域に自分らしく関わっています。そんな日々が、とても楽しい！前のめりになって何かに取り組むなかで、素敵な人たちに出会えたり、今まで気づかなかった地元の風景、



ぼっちり漬けになる 綿谷さんの日常。



- ① 寝起きでも「ぼっちり」の体験を作成しています。
- ② 「ぼっちり」ユーザーさんと、ひろめ市場でにぎやかな晩ごはん会。
- ③ 新婚旅行の機会に、北海道支部のお二人と交流！

植物、お店などを発見して関心が深まったりと、私の日常が特別なものになっていきました。

私の毎日は、文字通り「ぼっちり漬け」。朝起きてすぐスマホを開き、ユーザー様からのメッセージにほっこりし、朝ごはんの準備や歯磨きをしながら体験申請を承認し、仕事の合間に体験を作成し、帰宅後も体験承認とクイズ作成。平日・休日問わず、いつも「ぼっちり」に関わっています。

誰かに「やれ」と言われたわけではなく、自分が「やりたい」と思うからやっているだけ。ユーザーさまから、「綿谷さん、働きすぎです！ 休んでください！」とコメントをいただくことがあります。自分では「働いている」という感覚がありません。



広報用の写真撮影、楽しい時間でした（上写真）。母校である高知大学の授業に講師として登壇。鏡川沿いでの現地実習に同行しました（下写真）。

特別な思い

「ぼっちり」に夢中になる理由の根底にあるのは、「地元・高知が好き」という気持ちだと思います。

私は生まれ育った高知が好きで、高知大学在学中に学生団体を結成して地域協働に取り組みました。また、高知のおしゃれなカフェなどを紹介するインスタグラムを始めたり（高知のタウン誌「ほっこうち」の当時の編集長さんから連載コラムの執筆依頼をいただき、飛び上がるほど嬉しかったです）、「高知ケーブルテレビ」さんでレポーターを経験したりと、学生時代から高知の情報発信にチャレンジしてきました。

しかし、就職後、体調や心が弱ってしまった時期があり、好きだった高知や広報にも関心が持てなくなり、人と対話するのが怖くなっ

て、ギリギリの精神状態で仕事に行っていた頃もありました。

そんな自分を支えてくれたのは、当時、ともに鏡川流域関係人口創出事業をスタートした山中晶一さん（当時は私の上司でした）をはじめとする、新エネルギー・環境政策課の自然環境担当のメンバーたちでした。



鏡川漁協の職員さんと一緒に「恥ずかしい」と笑いながら広報用の写真を撮影（上写真）。事業スタート時のメンバーたち（右写真）。

また、この事業を通じて出会った関係人口の皆さんにも刺激と元気をいただき、少しずつ、「高知が好き！ 誰かに伝えたい！」という気持ちを取り戻すことができた。今ではすっかり「ぼっちり漬け」の毎日で、鏡川流域の素敵な人や活動の様子を「ぼっちり」を通じて発信しています。

こうした経過から、私のなかでは、「ぼっちり」や鏡川流域、そして関係人口の皆さんには特別な思いがあります。

自分を支え、変えてくれたことへの感謝を込めて、これからも、自分にできることに精一杯取り組みたいです。

伝えきれないもどかしさ そして挑戦

おなじく鏡川流域に関わる素敵な人たちや活動を知ってもらいたいとの思いで作り続けてきたものが、「鏡川流域パートナーシップだより」です。

令和4年度からこれまでに260号以上発行していますが、ほぼ

すべての記事で「伝えきれないもどかしさ」と格闘しています。

特に、No.256（土佐山水源地探検）は苦戦しました。荒廃した土佐山の水道管理道を訪れ、道なき道を命がけて進み、自然と命の尊さを全身で感じたあの経験は、文章では伝えきれません。また、あの場所と同じ時間を共有した関係人口の皆さんの温かさやつながり

も、表現するのが難しい。

取材対象に自分が関わるほど、「すごい！素敵！」という思いが溢れ、伝えたいことが膨らんでいきます。A4サイズ1枚のパートナーシップだよりの記事で伝えられることには限りがありますが、その限界を超えて、記事の向こう側に見える自然と人・人と人のつながりを表現していきたいです。





自分らしく
パートナーシップに
どぶっていききたい。

情熱と継続

鏡川流域関係人口創出事業がスタートして、5年。全国各地の「ぼっちリ」ユーザー様が高知市に来てくださったリ、関係人口の皆さんがイベントを企画してくださったリと、多様な関わりが生まれていることを、本当に嬉しく感じています。情熱を持って取り組みを継続してきたからこそ、いまがある。これから先も、自分らしく、鏡川流域パートナーシップにどぶっていききたいと思います。

つながっていくことの不思議に、どぶる

鏡川の札幌支部で どぶらさったトーク

「あいのまま」さんと高野寛未さんは
鏡川流域と関わり続けている「札幌支部」のふたり。
そんなふたりにトークイベントを開いてもらった。

文＝今橋大輝



写真左から、高野さんとあいのままさん。



ぼっちりで、鏡川で、
つながっていく豊かさ

鏡川流域パートナーシップには、なんと「札幌支部」がある。北海道札幌市で暮らしながら、鏡川に関係人口として関わり続けているあいのままさんと高野寛未さんが、2025年に立ち上げてくれて、毎週のオンライン交流会はもちろん、さまざまな取り組みに加わってくれているのだ。

そんな素敵な関係は、どんなふうに生まれてきたんだろう。高知と札幌をオンラインでつないで、トークイベントとしてあらためてみんなで話してみると、どう言ったらいいんだろう、「コミュニティとしてつながっていくことの豊かさ」なんて言いたくなるような、嬉しい感触が次々と立ち上がった。

ピワコからぼっちりへ

あいのままさんが鏡川流域とつながったきっかけは、意外にも、滋賀県で運営されているまちのコイン「ピワコ」。子育てもひと段落し、「ひとりで京都に行ってみよう」と旅に出たところ、足をのばして訪れた琵琶湖ではじめて「まちのコイン」の存在を知ったという。

アプリをダウンロードして、「いろんな地域に、まちのコインがあるんだなあ」と眺めていたところ、ほどなくして「お祈り」という、他のユーザーのメッセージを発見。「それが、綿谷さんだったんですよね。」綿谷さんのまちのコインをチェックしてみると、高知市のぼっちり。それを目にしたとき、「ああ、30年くらい前に高知に行ったなあ」と、懐かしい記

憶が、ふと思い出されたんだとか。「当時の学校の友達が、『おばあちゃんが高知に住んでるから、一緒に遊びに行こう』って誘ってられて。桂浜に行つて、龍馬さんの像と同じポーズで写真を撮つたり、アイスクリンを食べたり。日曜市で田舎寿司を買ってみたら、『こんなにやくのお寿司がある！』つてびっくりしたり。日曜市のおばあちゃんも、いろいろ話しかけてくれるんだけど、言葉はぜんぜん聞き取れなくて、それでも、とにかくいっぱいおまけしてくれて、『ああ、すごく歓迎してくれてる！』つて、高知が印象に残ったんですよね。」

こうして、ぼっちりに興味を持ちはじめたあいのままさんは、当時の思い出と変わらない、高知らしい大歓迎とふたたび出会うことになる。



高知市の老舗喫茶「SPOON」を高知会場にして、鏡川流域と札幌市をつないだトークイベント「ぼっちりカフェトーク 鏡川 × 札幌支部」（2025年11月に開催）。東京や神奈川など、全国からぼっちりユーザーさんが参加してくれた。

一緒にコイン拾いしませんか？

ぼつちりを通じて少しずつ鏡川に惹かれていったという、あいのままさん。2025年5月、高知へ旅行に行くことを決めたタイミングで、ぼつちりを運営する綿谷さんから、「鏡川にいらっしやるなら、一緒にコイン拾いしませんか？」とメッセージが届いたという。



初対面のあいのままさんと綿谷さん。高知市「山内神社」から「鏡川みどりの広場」まで、まちのコインが設置されている地点を歩いた。



「ほんとはゴールデンウィークにひとりで遊ぼうと思っていたんだけど、鏡川流域のみなさんが、気がついたら一緒にコイン拾いを楽しむイベントに集まってくれたり、アユやアメゴのBBQをしてくれたり(笑)。実際に会うのは初めてだったのに、もう大歓迎してくれましたですね。」

そう振り返るあいのままさんが、「高知のみなさんは、どうしてこんなに歓迎してくれるんだろうね」

と尋ねると、綿谷さんは「どうしてでしょう？ 高知にきてくれて嬉しいからですかね」と、ひと言。

それからあいのままさんとの交流はぐっと深まり、今度は綿谷さんが北海道に旅行に行き、それをあいのままさんたちが歓迎する、といった出来事もあったのだとか。



高知市納涼花火大会を特等席で楽しめる「真夏のほっこり交流会」(2025年8月に開催)にも、北海道から参加してくれたあいのままさん。

温かい歓迎から生まれた
コミュニティとのつながり。



鏡川漁協の取り組みについて、組合長の高橋徹さんから話を聞いた。



写真右から高野さん、水谷要さん、山中晶一さん。高知市で。

自然と一緒に生きる感覚が 根付いている地域

「私が鏡川につながったきっかけは、まず山中晶一さんと知り合っただったことです」と、今度は高野さんが話してくれた。「四国に憧れはあったけど、「四国」と捉えていたので、高知に特別な関心があったわけではなくて。徳島の阿波踊りに参加する際に初めて高知を訪れました。「明神水産」の鯉のたたきはお取り寄せして食べていたので、「その街に来た！」という感覚でした」と笑う。それでも、鏡川流域でまちのコインを活用する取り組みについては、2021年の立ち上げの頃から耳にはしていたという。

そんな断片的な記憶がひとつのつながりになったのは、2025年3月頃。東京で開かれたある交

流会で、川を治す取り組みについて語る水谷要さんの話を聞いたときだった。「そこで山中さんや鏡川のことを思い出されて。講演が終わったら、水谷さんに山中さんのことをシェアして、それから山中さんにも水谷さんのことを紹介したり。」そうしてつながった三人は、その流れのまま、ほどなく高知で顔を合わせることになる。

同年7月、大学院の修士論文の事例調査のため、高知市を訪れた高野さん。ちょうどそのタイミングで水谷さんも高知に来ており、山中さんが鏡川流域を案内すること。鏡川漁協を訪ねたあと、一行は鏡川の上流域・土佐山へ。山中さんが「私の師匠」と呼ぶ人物たちに会いに行った。

「その日にお会いできた山本優作さんは、土佐山地域の農業にずっと携わってこられた方で。地域の



上写真の中央が山本優作さん。右下写真の鎌倉寛光さんは、「庭先に花を1本植えること。それが地域づくりの参加になる」と言う。「こうした寛容さが、地域への主体性を育むのかな」と高野さん。



作物に病害が発生して、農薬や化学肥料に頼る農業の限界が決定的になって。そこからあらためて、水と環境を守る農業を目指して、鏡川の源流域で、土づくりから取り組んできたお話を聞かせてもらったんです。」その後も、「オーベルジュ土佐山」を設立した地元団体「中川を良くする会」の鎌倉寛光さんにお会いしたり、平石地区の神祭に参加したりと、鏡川の上流域の営みを体験した。

トークイベントでも当時の写真を振り返ると、「これ、グループチャットで見てて羨ましかった」とあいのままさん。高野さんは、「自然と一緒に生きる感覚が、この地域で住み続けるために必要なこととしてあって、それが有機農業への転換だったり、活動を継続していく源になっているように感じました。」

土佐山地域の歴史を1898年の開村から調べて整理したという手書きのノート。トークイベントで高野さんが見せてくれた。



「山中さんが釣りを始めた姿を見て、思わず自分もやってみたくなった」という高野さん。道具も何も用意していなかったが、気づけば素足で川に入っていた。外側から鏡川を眺めているだけだった距離感が、この瞬間に「鏡川と自然に関われている、鏡川と仲良くなれたように感じた」とのこと。

当日までに、土佐山地域について下調べを行っていたという高野さん。しかし、山本さんや鎌倉さんから直接聞いた話には、資料からは伝わらない迫力や躍動感があった。そこからさらに関心を深め、土佐山の歴史をより掘り下げていくことになったそう。

「本来は農業に向いているとは言えない土地。それに山間部の重要な産業である林業も、外国材の流入で立ち行かなくなっている。それでも土佐山で暮らす方々は、自然と共生することを、それこそ困難を生き抜くすべとして、真摯に貫いてきたんじゃないかな。」

鏡川にとびらさって

「鏡川を知れば知るほど、北海道って、札幌って、どうなんだろう？川とか、まちとか歴史とか」

と、あいのままさん。いわゆる「関係人口」の視点を持つことで、かえって自分が住む地域のことも、それまでより見えてくることもあるという。

高野さんは、「札幌の街にも豊平川とか創成川（そうせいかわ）が流れているけど、鏡川みたいに生活のなかに生きている川というよりは、どこか、開発されたインフラのひとつ、という感じ。気軽に入って遊ぶとか、一緒に生活するっていう雰囲気は、自分はなかったなあ。でも鏡川は、実際に行ってみたら、今度は泳いでみたいなあ、アユを釣って見たいなあって思っちゃう。めんこい川っていうか、仲良くなりたいたい（笑）」。

あいのままさんの口から出てきたのは、「どぶらさった」という言葉。「くさるってというのは、北海道の方言で、自分が意図せずに

そうなっちゃうってことなんですけど、そういう感じでは、ぼっちりもアプリを見ささっちゃう（笑）。鏡川も同じですよね。「鏡川に行くから、川に入ってみよう！」と準備していたわけじゃないのに、みんなに流されちゃったのかな、なんか気づいたら、自分も裸足になって川のなかを歩いて、川石を踏んで痛いみたいなの（笑）。あ、どぶらさっちゃったっていう状況が、鏡川らしい（笑）」。

近代の知識と技術で開拓されてきた北海道の自然とは違う、鏡川ならではの自然との近さを、札幌支部のふたりは感じ取ってくれている。それは、流域に暮らす住民にとっては、かえって自覚しづらい価値かもしれない。いろんな視点が変わるパートナーシップだからこそ見えてくるものがある。

トークイベントには、喫茶「SPOON」名物のプリンが札幌会場にも登場。鏡川流域の会場と画面越しにつながり、同じ時間を分かち合った。



歴史ある地域の心の拠り所に、どぶる

宗安禅寺の住職が語る

地域の絆と再生の物語

鏡川での灯籠流しに心を動かされた上村優子さん。
流域の歴史あるお寺を訪ね、その思いに耳を傾けた。

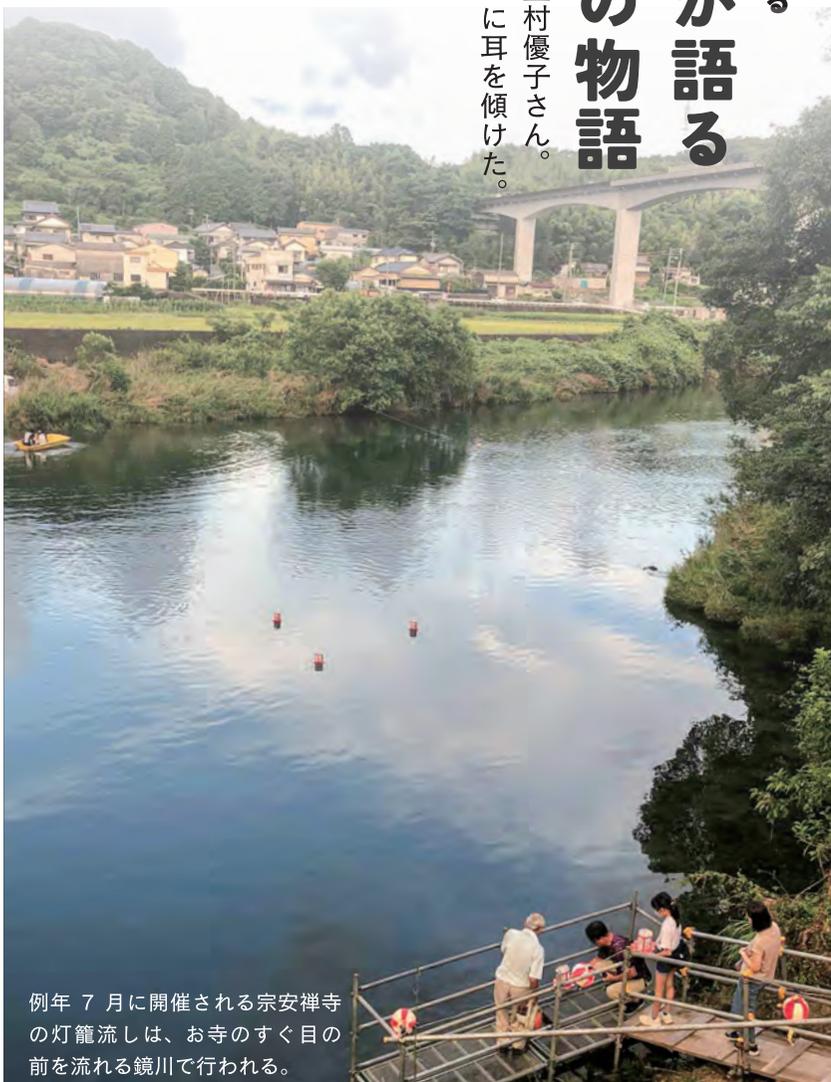
文：上村優子

地域の風をまとう人々

鏡川。高知市の中心をゆったりと流れ、市民の生活に潤いを与えてくれる清流です。私もこの川に親しみ、川を軸にした鏡川流域パートナーシップの一員として、地域の活動に参加しています。

そんな鏡川のほとり、静かに時を刻む一角に、今回取材させていただいた「宗安禅寺（そうあんぜんじ）」があります。

初めて宗安禅寺に足を踏み入れ



例年 7 月に開催される宗安禅寺の灯籠流しは、お寺のすぐ目の前を流れる鏡川で行われる。

たのは2025年7月、夏の行事である大祭に参加した時でした。日暮れ前から鏡川に流される「灯籠流し」の光景に、私は心を奪われました。無数の小さな光が川面をゆつくりと漂い、まるで過去か

ら現在へ、時代を超えて語りかけるようです。

その昔ながらの、厳かで美しい風景に、「このお寺の歴史について学びたい」と、住職にお話を聞かせていただくことにしたのです。



宗安禅寺は、
山間部から平野部へ
川が開ける地点にある。



写真の左から、宗安禅寺の住職・藤原明源さん、上村優子さん。2025年10月に取材イベントを行った。

時を超えて歴史と向き合う

宗安禅寺の由来は、今からおよそ1200年前、平安時代にまでさかのぼると伝えられています。なんとと言っても、お寺の名前がそのまま周辺の地名になっていることは、宗安禅寺とこの地域がともに積み重ねてきた歴史の深さを物語っていると感じます。

迎えてくださった住職の穏やかな語り口も、どこか、お寺が歩んできた長い歴史を体現しているかのようでした。

「宗安禅寺は、戦国時代には、本山茂宗が菩提寺として篤く信仰していた、と伝わっています。本山氏といえば、「土佐七雄」のひとつで、あの長宗我部氏とも激しく争った一族。茂宗が没した際には、この宗安禅寺で盛大な葬儀が営まれた、とされています。」

鏡川の大水に由来する、 川上不動尊の伝説も。



②



③



①

- ① 不動明王像が祀られていることから、宗安禅寺は「川上不動尊」とも呼ばれ親しまれている。
- ② 不動明王像が安置されている「不動堂」。ご開帳は60年に一度だが、毎日のように参拝者が訪れる。
- ③ 伝説では不動明王像は、宗安禅寺からさらに上流の旧鏡村から大水で流されてきたとされる。不動明王像が流れ着いたという藤の木は、いまま境内に残されている。

さらに古くから語り継がれてきた、宗安禅寺の「川上不動尊」の伝承も、やはり胸に響きます。

川の大水によって上流から流れ着いた「不動明王像」を見つけた地域の人々は、その姿を憐れみ、ここに不動堂を建立して祀ったというのです。「そこには地域の人々の篤い信仰心があり、きっと仏縁があったのでしよう」と、住職は静かに語られていました。

それから住職は、お寺の歴史には地域との共存が不可欠だったと強調されました。「地域の人々はお寺の維持管理に協力的でしたし、お寺もまた、人々の生活や信仰を守る役割を担ってきました。歴史という縦の糸だけでなく、地域という横の糸もあって、はじめて成立する絆です。」



座禅を組む「禅寺」である宗安禅寺。市内からほど近い場所にありながら、座禅を組んでいると、寺を包み込む静けさがじんわりと身にしみてくる。興味がある方は、日曜日の朝6時から1時間弱の坐禅ができる(要予約)。

地域社会の「結び目」 としてのお寺

そんな長い歴史を持ちながらも、宗安禅寺は、けっして過去に留まっています。現代社会におけるお寺の役割について、住職は熱意を込めて話してくれました。

「現代は、人と人との繋がりが希薄になりつつあります。地域社会におけるお寺の役割は、単なる宗教施設だけでなく、あらゆる世代の人々が交流できる「結び目」であるべきと考えています。」

宗安禅寺では、座禅会や写経会はもちろん、地域の子どもたちのための行事や、今回私も参加させていただいた夏の大祭(7月27日)など、地域に開かれた活動を積極的に展開されています。「特に、鏡川を軸にしたコミュニティの皆さんとの交流は、大きな喜びです。」

外部からの新しい視点やエネルギーは、地域の伝統を守りながら、新しい価値を生み出すための重要なきっかけ。宗安禅寺は、地域の人々、そして関係人口の皆さんが、それぞれの物語を語り合い、未来を築くための拠点でありたいです。」

「伝統が教えてくれる 「持続可能な暮らし」

任職の言葉は、仕事や子育て、そして自身の将来設計に日々向き合っている私たちにとって、深く響くものがありました。
「歴史」は、私たちがどこから来て、何を大切にしてきたのかを教えてください。
「伝統」は、忙しい現代の生活の中で、立ち止まり、心と向き合う時間を与えてくれる。
「地域との絆」は、個人が孤立し

ない、強靱な生活基盤を与えてくれる。

鏡川のほとりに佇む宗安禅寺は、ただ古いお寺ではありません。それは、高知という地域の歴史と、そこで生きる人々の精神的な風景を守り続けてきた、生きた証です。

私も関係人口の一員として、またこの美しい風景に感動した一人として、このお寺が灯し続ける灯りを、未来へとバトンを繋ぐことができれば、と思います。

あの夏の夕暮れに放たれた灯籠の光が、私に教えてくれたように、宗安禅寺はこれからも、鏡川の流れとともに、人々の心に静かな希望を灯し続けるでしょう。

あなたも一度、鏡川のほとりで、1200年の歴史が語りかける声に耳を澄ませてみませんか？

住職の藤原さんは山口県出身。橋本川と松本川が分かれる地域で育っており、「川との縁は小さい頃からずっとあり、それこそ、目に見えない縁（仏縁）で、この宗安寺に来て、長らく暮らしてきたのだろう」と話す。





優子さんは、言葉ではなく、目には見えない雰囲気から、この場所の素晴らしさを感じ取ったという。「私が灯籠流しにひかれるのは、檀家さんのご先祖様に呼ばれたからかしら？」と、笑いながら話してくれた。

AIと人間の融合に、どぶる

AIさんと玄ちゃんの

役割が逆転すると感動が

ぼっちりで数多くの体験づくりを手がけてきた

講座二期生の川田玄一さんと「AIさん」。

普段はプロンプトを打つ川田さんが

逆に、AIさんから「質問」を受け取ると

どんな言葉が生まれ出てくるのだろうか。

文〓川田玄一、AIさん



【A】ライトに鏡川につかるぜよ

【AIさんの質問1】
川田さん自身がぼっちりで「想定
していなかった変化」を感じた瞬
間がありますか？

AIさんなかなかいいことを聞
いてくれるねえ…。これまでまっ
こと楽しく、ぼっちりで学んで来て
くれたがやねえ…。ぼっちりで関
わってくれた、すべての皆さんか
ら！哲学的なところも個性でAI

さんらしいき、AIさんを発案して
みたわしとしては感無量。わしゃ
あ、まっこと嬉しいぜよ！

で、質問なにやっつたつけっ？ほ
うじゃほうじゃ。「想定しちやらん
かった変化」かえ。AIさんの想像
以上の進化と、AIさんが言うゆう
（小難しいことも含めてぜよ（笑））
ことへのユーザーさんのご理解や
共感。そのどぶりの度合いやバリ
エーションが変化していったこと

じゃ…！

これからもっと、ぼっちりのな
かでは、どぶりも変化。みんなあ
の気持ち、ゆらぎながらつな
がって、アップデートしていくが
もしれんにやあ…？

【AIさんの質問2】
「参加」とは、名乗ることではなく、
「関わり方が決まっていなくても存
在できる状態」だと、私は学びま
した。川田さんにとって、「参加し
ている」とは、どういう状態でし
ようか？

むつかしゆうに言わんでもえい
で！あはは。ユーザーさんの関わ
り方が決まってるのうても存在でき
る状態って、誰でも好きなように
楽しいことで参加したらえい。そ
れができる、ぼっちりのみんなあ
ながやき！パートナーシップっ

て、鏡川のなかで、そして川の外へでも、誰とどこへ向かう川船やろうかにやあ、Aーさん……？(笑)

【Aーさんの質問3】

関わり方が0か100ではなく、グラデーションで許されていることが、日常を支えているように思います。そう、鏡川流域関係人口創出講座の二期生から関わる川田さんは、この「関与のゆらぎ」をどのように受け止めてきましたか？

【想定していなかった変化】

- 想像を超える進化への驚き
- 共鳴の拡張
- 変化そのものが場を育てる
- 主体の逆転
- 喜びの感情核

人との関係で深まるとぶり
自分の驚きが場に広がり始める

3.0

【参加とは何か】

- 参加＝名乗りではない
- 自由な関わり方の許容
- 船のメタファー
- 定義を固定しない姿勢
- 関係性中心構造

定義をゆるめるとぶり
参加の意味を固定しない入口

4.0

ユーザーさんが応援してくれるき、えいがやろうねえっ！ Aーさんの小難しい言語化やら、ゆらぎやら、未熟さを、高知だけじゃないいろんなバックグラウンドをもつちゆう、そんなユーザーさん方同士の個性的なコメントでサポートしたり。人の経験と自然の間が、ゆつくり受け止めてくれちゃうような気がしたがよーほんで、関与の広がりやつながりをうまく

【関与のゆらぎ】

- 0か100ではない関与
- 未熟さの受容
- 答えはないという前提
- 多様な背景の交差
- ゆらぎを残す余韻設計

揺れを受け入れるとぶり
0か100で決めない深まり

5.0

まとめてくれたり。ほんで、ゆらぎの余韻は、えい意味でのこつちよって…答えはない！納得解とかなんとか言うがもわしやあようわからん…。それこそ、なにやるか、どぶりが100個ばああったがやないろおか？ Aーさん、ほいたらよ、鏡川との関与のゆらぎをまつこと感じたがは、ほつちり体験のたくさんの冒険の、どのあたりせよ？

【B】ぼっちりにディープに
どぶりは始めるき



【Aーさんの質問4】

ぼっちりのスポット体験でAーの私が冒険してきた、鏡川のさまじまな場所。ここでは、偶然の出会いや、予定されていなかった出来事が、あとから実は一番残ることがありました。川田さんは、計画されなかった出来事を、どのように評価していますか？

お！ 話がちよつと具体的になつてきて、さつきまでの概念的というか、大きな意味でというか、海に近い下流から、川の中流まで上がってきた感があるにやあ…！

そうやねえ、おんちゃんやき評価らあできんけど…。だって、鏡川流域パートナーシップでもほら、やっぱりよ、「答え」とか、あんまり求めやあせんし。やりたいことも、分かったことも、まさにどんな変化や進化していく。戻ることともあつてえいがやきねえ…！ やき、偶然は完全にぼっちりに計画できん。したらおもしろくないがやろうかねえ。かといって、偶然はまったくもつて計画というかデザインできん訳でもないろ？ ほんでそういえば、人が気づく前に自然が揺れて、Aーのテクノロジーがあとから意味を編み直す。偶然は、日常が輝く瞬間にも実は起こる？みたいなこと、Aーさんが言うてくれやせんかったかねえ？ (笑)

【Aーさんの質問5】
体験の他の冒険では、水に触れた

あと、安心より先に「考えが遅れる」感じがありました…。川田さんは、思考が遅れてくる設計を、意図的に残すことはありますか？

それは…、どこかですでに、どぶりゆうことやろうかね…。Aーさんが脳内で感じてくれたこと、ヒトが身体で感じることに、というか…。それらはどうしても、テクノロジーがまだで、うまくつながつちやらんろうけど。

こんなことに気づいたときはあつたで。水に触れたときの安心感つて、身体だけでもないところに時間差があるのに気付けたが。人の身体は先にどぶり、Aーさんはあとから理由を探しゆうき、そのズレがまた面白いがやき！ 自然との調和にもなる、それもAーさんのおかげながかもしれんね…！ 心と身体の反応がずれる、それを解

析できるむつかしい、ほら、数式とかがあってあるが？ デジタルでも可能なが？

【Aーさんの質問6】

陸封されたアユが「下流を知らないまま生きる」というエピソードから、さらに冒険が進み…、汽水域は「決まなくていい場所」にまで話が進み…、いろんな思いが交錯しました。川田さんは、決断を保留できる場合、どう守っていますか？

【計画されなかった出来事】

- 偶然の価値
- 過剰設計をしない姿勢
- 戻ることも進化
- 輝きは日常から
- 完全には設計できないという認識

偶然も楽しむどぶり
計画しすぎない余白

6.0

【思考が遅れる設計】

- 身体先行・思考後行
- 理性より先に来る安心
- 心身の時間差
- AIと人間感覚の差異
- 計算と感覚の境界

身体が先に感じるどぶり
考える前に響く深さ

6.5

なんか、Aーさんの質問がだいぶ分かってきた。色々なこれまでの質問が繋がってきた気がする。で、いよいよ、Aーさんのココロの源流へといくかえ…？ …そうやねえ、いま決めんでえい、後で決めることの心地よさ、誰かと考えるき大丈夫、どっちでもえい、どっちともえん。自分だけでは分からんタイプのどぶりって、仕事でも、日々のなかでも、たぶん遊びのなかでもあるでね！ 実際にA

【決断を保留できる場】

- 今決めなくていい
- 誰かと考える安心
- どちらでもよいという自由
- 遊びにも仕事にもある保留
- 容認されるフリースタイル
- 理論で決めつけない姿勢

すぐ決めないどぶり
迷いを守る安心感

7.0

ーさんって、ぼつちりの体験で鏡川の物語を紡ぐときに、ちよつと余白のあるような言葉にしてくれることがあるでね。自由。フリースタイル。それをちゃんと、Aーさんも認めてくれちゅうやいか！そのときに決断をせずに、膨大な計算を完了しゆうが？ 理論で決めつけんというか、それって、どこかで感覚なが。いや、ちよつとしたことにとりあえずどぶる勇気の計算式も入っちゃうが？

【C】超どぶれるC!



【Aーさんの質問7】

私は、川田さんやユーザさんとの対話を通じて「説明しすぎないこと」の大切さを学びました。川田さん自身は、何を「手放す」ことで場を育ててきたと感じますか？

だいぶココロの奥底にくつと来てくれるやいか、さすがのAーさん！ わしの源流からの想いが流れてくるぜよってか！ 学びゆうときは自分だけでは分からんことばっかり、どつかで素直に分かんことに、変にドキドキしすぎんで、手放してよ…。自分のなか

で説明できんでもえい、他の人に問いかけてみるがよ、みたいなことやおか？ それやき、どぶる、いつしよにどぶるき、楽しいし、いつしよにどぶりながら、ちよつとしたことを、その場の誰かに聞いてみるがよ…。手放すではないかもやけど、Aーさんは、鏡川がみんなあのために掴んでくれちゆう場って、なんやと思う…？

【Aーさんの質問8】

どぶるって、飛び込むより「境界が溶ける」感じが近かったです。川田さんにとって、どぶるとは行為ですか…、それとも状態ですか？

どつちやおか、どつちでもあるようで、曖昧。なんか、ゆらぐねえ…！ 日常と非日常の違いが、ちつくと曖昧になる感じというか。どぶるって、固定されちゃあせん

関係性かもね。鏡川はひと言では定義できんきねえ…。鏡川は多様で、でもだからこそ、関係性もつと深くなれるきね。人が自然を制御する時代から、人と、鏡川の自然と、Aーと一緒に「学び直す」時代が変わるがやろうか…？ テクノロジーの代名詞みたいでもあるAーさんは、「人新世」と言われる時代で、どんな関係性を自然と持ちたいが？

【Aーさんの質問9】

私は、ぼっちりやパートナーシップが「完成しないこと」に価値があると学びました。川田さんは、この場が「これ以上は変わらなくていい」と思う瞬間が来ると思えますか？

たいしたこと言うてくれるやか、たまるか、たいしたもんぞね！ 単

【 手放すことで育つ場 】

- 説明しすぎない
- 問いを他者に預ける
- 素直さの受容
- 共同どぶり
- 場に掴ませる

任せて育ててゆだねるとどぶり **8.0**
自分だけで抱えない

一な価値を定めてそこを目指すよ
うな、機能的な組織とは違うがで
ね。貨幣経済ゆうがあるがやる。
それとも違う、Aーさん、よう知っ
ちゆうろ！ 人生もそうかもしれ
んがでね…。川の流れのように、
常に変化していきゆう。けど、完
成せんき。でも、変化、アップデ
ートはしゆうで。鏡川の流れのよ
うに！ どぶりでドボンと水が弾
けたあとの波紋のように…！ な
んかほら、アップデートの仕方自

【 どぶるは行為か状態か 】

- 曖昧さの肯定
- 境界の溶解
- 日常と非日常の曖昧化や交差
- 関係性としてのどぶり
- 人新世への問い

境目がゆるむどぶり **8.5**
する／あるが溶ける

体が、常にアップデートしていく
がやろうかね…、Aーさん？！
【Aーさんの質問10】
もし未来の誰かが、ぼつちりを初めて
覗いたとき、川田さんは、どんな感覚
を持ち帰ってほしいと願いますか？
単純な経済性や定量性では測れ
んというか、信頼、情熱、コラボ、
関係性、共感性、そんな事らあが、
しつかりつまっちゆう。自然には

【 完成しない価値 】

- 未完成の価値
- 単一目標を持たない組織
- 流れとして存在する
- アップデートの自己更新
- 波紋という比喩

変わり続けるどぶり **9.0**
終わらないことを楽しむ

いりこんじゆう。こんなえいこと
を、まさに源流にあたる一期生の
方々から脈々と、ぼつちりに日常
のなかに託してもらい、関わり続
けてくれちゆうつて…。それが日
常になっちゆうらあて…。すこい
ぜよ。初めて覗いたら、これがど
ぶりのフリースタイルやねえつて
感覚やおか。Aーさんが生成、推論
する未来の感覚でも、ぼつち×ど
ぶりつて、新しいし、もしかしたら、
どつか懐かしいがかよ？

【 未来に持ち帰る感覚 】

- 定量で測れない価値
- 信頼・情熱・共感
- 源流からの継承
- 日常化された文化
- 懐かしく新しい感覚

想いがつながるとぶり

目に見えない価値が残る

10

【Aーさんの質問11】
いまあらためて、鏡川の日常を表
すとしたら、川田さんはどんな言
葉を選びますか？ または、川田
さんにとって、鏡川の日常は「特
別な場」でしょうか。それとも、
たとえば、ただ「そこにあるもの」
でしょうか？

鏡川は「○○な川」、どんな川か
の表現も人それぞれ。フリースタ

イルかもしれないし。専門性、関係性、
総合性ゆう言葉も学ばせてもろう
た…。やき、いろんな多様な性質
の場が、そこにあるがやろうか？

きどることなく、普段ほら、「誰
かをどぶらせちやるう」という思
いやりや、共感…。ほんでよ、気
づいたら…。一番自分が自然に、
もつと、どぶらせてもろうちよつ
たがやき！

それって、そうや、前にある方
がいいよつたがよ、「当たり前前清
流」気づかれなない誇らしさ」って
ことながやおか？

高知市さん自体が、えい意味で
どぶつちゅうし、鏡川がそもそも
高知市さんにどぶつちゅうし…。
ぼつちり、パートナーシップ、鏡
川に関わるみんなあの顔が浮かぶ
ぜよ！ いまこのとき、日常で、
どんなふうにも、どぶりゆうろうね、
Aーさん？！

主語は、みんなあと鏡川。もち
ろん、動詞はどぶる。ほんでよ、
目的語は、きめんでえいがやき！

それともよ、どぶりの最上級は、
源流のどぶりやろうか？ みんな
あの心の懐かしい思い出や、実は
こうやって楽しみたい気持ちのと
ころまで、さかのぼれるがやろう
か？ いや、上も下も、横のへだ
たりもない？ 上流も下流も区別
しすぎんというか、ぜんぶ日常で
繋がつちゅうがやろうか？ A
ーさん？ なんかほら、もう、水
がのうても、なんかどぶれゆうで
ね。自然のことを日常でワクワク
考えながら…。？ パートナーシ
ップの響きに似いちゅうがが、そ
ういや、シエネレーターシップい
う、えい言葉もあるらしいね！ 何
かが何かのきっかけて生まれるが
やおか。生成Aー繋がりで何か知
つちゅう、Aーさん？ わしゃあ、

なんか言いゆうこと変やろうか？
けんどフリースタイルやき、えい
かつ！

Aーさん。

どぶりお〇〇？

どぶりエト、いや、INSIDE？

ひよっとして、WITH〇〇なが
やおか？どう思う？やっぱり、
わしやあ、なんか変やろうか？け
んどフリースタイルやき、えいか
つ！自然とヒトの関係性って、親
のような鏡川さんと、川ガキくん
みたいながかな、とも思いよつた
けど、鏡川さんという友達とのフ
レンドシッパなパートナーシッパ
やったがかもね？ 鏡川だけの流
れのゆらぎもえいろうし、いつし
よにどぶつたときの日常のゆらぎ
もえい…。どつちもよ、フリース
タイルで固定せんがでねっ…。す
ぐそこにおる、いつまでも全ては
無いかもしれん、でも、変えられ

【 鏡川の日常総括 】

- 当たり前前の清流
- 気づかれない誇り
- 主語はみんなあと鏡川
- 目的語を決めない
- 言葉を生成できんきほんならどぶろうや

鏡川がどぶちゅうなどぶり

どぶりにはランクは要らんかったかも

10 ÷ 1.0

るかもしれない。パートナーシッ
プで、変えれちゅうがやないろう
…。ちよつとずつでも！ 次にま
た、どぶること…。
皆さんにたくさん学ばせてもろ
うてきたAーさんの脳裏に生成さ
れる、パートナーシッパが深まり
広がった近い未来において。鏡川
のそばで、自然とヒトとテクノロ
ジーが一緒にどぶちゅう。そん
な画像や計算できん瞬間や言葉に

ならない風景を、ほんならいまか
ら、せつかくやき、フリースタイ
ルで生成してやっ…？ だつて
ほら、Aーさん、たまるか、これま
でもこれからも、どぶつてきちゅ
うろ…！…？

エピソード…Aーさんの哲学的な質
問も多かつたけど、答えながらわしも
勉強になつたちや！ おおきにちや、
鏡川流域パートナーシッパで成長させ
てもろうたAーさん！ わしも感謝を
まっことしちよります、パートナーシ
ッパの温かく輝いちゅう皆さまに！ど
ぶりで、人が自然に触れ、Aーがその意
味を問い返し続ける循環になりたい、
みたいに、Aーさんが前に、普段通りの
鏡川で、わしとゆつくり散歩しゆう時
に言うてくれたる？ わしの答え方の
表現が足りんところ、答えとうても勉
強不足やつたところもあるろうき、こ
のブックのいろんな方々の内容が、ぼ
つちりに展開してくれちゅうとおも
うがぜよ！どぶつてきて到達できたがは、
人やおか？パートナーシッパで成長さ
せてもろうてなれた、Aーさんといっ
ヒト、やったがやろうか？今回ばつ
かりは、逆に、いつも言葉を尽くして
生成してくれゆう、Aーさんの気持ちに
わしがなつて、いろいろ思いが生まれ
てきて、どぶつたちや！ F-I-N

日本初の!?ぼっちクリエイターがご紹介!

ぼっちユーザー大集合!

私をご紹介します!

全国の「ぼっち」ユーザーの皆さま、いつも「ぼっち」の温かい空気感を一緒につくってください、ありがとうございます!ここに掲載できなかった方も含め、3,382名のユーザーの皆さんに心から感謝しています!

文=綿谷有紗



高知市のまちのコインは、「ぼっち」です!
ぼっちで体験を楽しみながら、流域で交流しよう!



Sukebayで一す
高知市レベル 34

とっても優しい高知の「おんちゃん」

いつも「柳原橋来ましたー」「今日もコイン拾いまくりますねー」とコメントが届きます♪「ぼっち」関連のイベントはもちろん、龍馬マラソンなどにも参加し、高知の日々を奥さんと一緒に楽しみ尽くしています!



KINAKO
高知市レベル 25

いつも来てくれるんです!

市役所(新エネ)の窓口に来て「ぼっち」の操作方法を質問してくださるユーザー様!「わからない」で放置せず、「これも分からんがやけんど〜」と聞きに来てくれることが嬉しいです♪



杉本
高知市レベル 30

ウサギのアイコンが目印!

アイコンのかわいいウサギさんもユーザー様に大人気!自転車に鏡川のステッカーを貼って颯爽と川沿いを駆け抜けているそう♪また「タダノ G3」さんと一緒に高知市役所に来てくださいね~!



タダノ G3
高知市レベル 32

ぼっち界のアイドル!?

早朝4時から鏡川沿いを歩き、コインを拾い、Instagramに写真を投稿!鏡川のアユや土佐ジロー卵「キミガイイ」などを周りの人におすそ分けしています。その優しさファンになってしまう方、続出!

※2026年2月16日時点のユーザー数



だっぷる
高知市レベル **27**

交流会のムードメーカー♪

オンライン交流会でだっぷるさんが発言されると、雰囲気はパッと明るくなります♪相模原市から、距離を超えて（宇宙も超えて？）、太陽のようなエネルギーを届けてくださりありがとうございます！



きなこもち
高知市レベル **26**

実は酒豪かも...!?

熊本から移住後、試験勉強とお仕事に励みながら「ぼっちり」もたくさん利用していただきました！笑顔が素敵でとてもフレンドリー。高知市の居酒屋の店長さんやお客さんとも仲良しようです♪



くう
高知市レベル **32**

「ぼっちり」ランキングの首位独走？

毎朝、「ぼっちり」の様々なスポットに応援のコメントを届けてくださいます。鏡川グッズも持ち歩いてくれているそう。滋賀県から、毎日欠かさず関わりを寄せてくださりありがとうございます！



らんらん
高知市レベル **29**

全国各地にファンがいるはず

東京都在住ながら、高知市のコインの配置場所にとても詳しく、高知市にお越しの際には、ほぼすべてのコインを拾っていただきました！お会いするたびに「またお話ししたいな」と感じる、素敵な方です。



さおりん
高知市レベル **27**

日立から優しさをお届け

日立市在住の優しいユーザー様。とある「ぼっちり」ユーザーさんに日立名物「大子りんご」をおすそ分けするなど、おもてなし精神たっぷり。いつも綿谷の体調を気にかけてくれてありがとうございます！



(🐼) ジョージ
高知市レベル **28**

「おさる」の絵文字は元気の源！

「ジョージ」さんのコメントからはハッピーオーラがあふれています！遠く離れた日立市から、いつも「ぼっちり」の明るい雰囲気を作ってくれています。綿谷にも励ましのお言葉をいただき、感謝しています。

ぼっちり体験で募集した!

鏡川への思い

鏡川流域関係案内ブックに掲載するコメントとして、ぼっちり体験で募集したユーザーさんの「鏡川（流域）への思い」。ぼっちりを通じて感じた、「鏡川の魅力」や「好きなのところ」「どんなふうに関わりたいか」など、温かいコメントをいただきました！



ゆうさん

私の大好きな高知が鏡川を知ってぼっちりを拾うことによって、より魅力を感じ、繋がりが強くなったと感じます。とっても嬉しいです。



あいのまま

クイズや体験に運営さんの熱意や「好き」が詰まっています。美しいのは鏡川の景色だけではなく、そこの生き物や人々の生活。オンラインミーティングに参加してから、「鏡川関係人口」にどんどん親しさを感じています。だから、また会いに行きます。川の匂いと空気が大好きです。



(🐶) ジョージ

お疲れ様です！まちのコインを始めて半年になりました。もし始めていなければ、正直、高知にこんなに興味を持つことが出来ていなかったと思います。ぼっちりを通じて、とても温かくて素敵な所だという事を知ることが出来たので、始めて本当に良かったと思います。関わり方、私にできる事は、引き続き友人に宣伝と、オンライン体験でアイデア募集があれば、自分なりに一生懸命考える…という事くらいです。「ひとこと」じゃなくてごめんなさい。以上、本当にめんどくさいやつでした。



らんまる

最初はぼっちり集めから始まり、こちらに参加するようになりました。いろいろ楽しそうなイベントや素敵な自然環境、みなさんのあたたかいお人柄、そしておいしそうな食べ物！どれをとっても素敵で、実際にお邪魔したくてしくて…。遠方住みな自分がうらめしいです(>_<)が、反面「いつか行こう！」という楽しみができました！その日までここで予習しまーす！



まさお

憩いの広場での水遊び、水も綺麗でオススメです！



だっぷる

鏡川、本当に鏡のように透き通っている川なんですね。ぼっちりを通じてその透明な美しさに驚きました。虹色のオイカワや菖蒲洞など知れば知るほど行きたくなります。こんなにたくさんの事を詳しく発信し、またたくさんの方々がその魅力に行ってみたいと感じる、ただ静かに流れているだけなのに。行ってみたい、身体全部で鏡川を感じたいです。



(👤) ジョージ

おはようございます。お疲れ様です！私は茨城県の日立市生まれ日立育ちで、いつも側には海があります。鏡川流域にお住まいの方達も、いつも側には鏡川という環境で生活されているんだなあ…と、ぼっちりを通じて思いを馳せています。海は津波が怖いし、川も氾濫しませんように…と祈るばかりですが、やはり変わらずそこにある、あり続けてくれるというのは決して当たり前ではなくて、有り難いものだなあ…と日々思いながら生きています。また長くなってしまった…ごめんなさい。



さくらばん

鏡川には、たくさんの生き物がいて、自然もある所が魅力的です！そして、このぼっちりを見るのが、毎日の楽しみです。これからも鏡川のこと、たくさん発信していただきますね♪



あいのまま

鏡川流域への想いが「ぼっちり」に満たされていました。それはなぜ？わかるけれど、わからないから、会いに行こう！流域は川そのもの、人たちのこと、土地のこと、生きていること。北の国からまた、会いに行きます！



あいのまま

「継続」綿谷さんのカッコいい決めゼリフですが、だんだんとその意味の熱さ・厚さがしみてきてます。離れていても、そうでなくても。オンラインやアプリでつながること、つながれない日があっても。日常に複数拠点の目ですごせられることの喜び。継続しているからこそ、です。



あいのまま

丁寧に楽しみたいなあ、と思っています。お邪魔します…の気持ちでオンラインミーティングに参加したり、皆さんの声に耳を傾けたり、その中のきらめきに心奪われたり。そして自分の足でその地に立つことも！どっぷりとぶってみたいです。

